徳島大学医学部附属図書館棟新営地
（庄・蔵本遺跡）
埋蔵文化財発掘調査報告

１９９４年8月

徳島大学埋蔵文化財調査委員会
徳島大学埋蔵文化財調査室

1　遺跡の名称　庄・蔵本遺跡
2　所在地　　徳島市蔵本町３丁目１８番地の１５
3　調査期間　　平成６年２月２５日　開始
　　平成６年３月２４日　終了
4　調査面積　　２８８㎡

5　調査の目的　図書館棟増設に伴う埋蔵文化財発掘調査

6　調査体制　　調査主体　　徳島大学埋蔵文化財調査委員会　委員長　武田克之
　　調査担当者　徳島大学埋蔵文化財調査室　　室長　　東　　潮
　　担当　　北條芳隆
　　北條ゆうこ

7　調査経過

２月２６日重機掘削開始、灰色粘土直下の黄褐色粘土層（G.L.約－1m）を停止面とする。３月１日重機掘削終了。２日、人力掘削開始、黄褐色粘土層（水田耕土）中より中世土器・須恵器片が若干出土する。６日までに調査区中央やや南よりの場所で旧陸軍関係施設とおぼしき東西にのびる溝と石列を検出。７日には調査区北半部で併走する３条の溝を検出（ＳＤ０１～０３）、時期は中世頃かと推定された。検出状況の写真撮影は雨のため途中で中止。９日、旧陸軍関係の溝の下層より江戸期の水路を検出し、写真撮影を実施。北半部ではＳＤＯ１～０３までの溝の掘り下げを終了。南半部の掘り下げを実施、暗褐色粗砂層（洪水砂）上面を検出する。この面の時期は出土した須恵器杯から奈良時代と判明。１０日、ＳＤ０１等の完掘写真を撮影。１１日からこの溝の実測、壁面の分層作業を行う。ＭＲＩ地区の人力掘削終了に伴い、１６日からは調査作業員を増員して暗褐色粗砂層の全面検出を開始。土層中から古墳時代の遺物が出土したが、遺構は確認されなかった。１７日にはさらに下層のシルト層の掘り下げを続行。１９日、調査区の南西から北東方向に流れる水路跡を検出、ＳＤ０４とする。堆積状況からみて、この水路は弥生後期に形成された自然流路と判断された。湧水が激しいことや調査日程の問題等を考慮せざるをえず、この遺構については全面の掘り下げをせず、部分的なトレンチ調査に止めることとした。２２日、調査区全体の写真撮影後、ＳＤ０４の掘り下げを実施し人力掘削を終了。機材の撤収を行う。２３日、ＳＤ０４の土層断面図、調査区北壁・東壁の土層断面図実測、併せて土層サンプルを採取。２４日、実測作業を完了し、調査を終えた。

８　検出遺構

①近世の溝

調査区の中央部を東西方向にはしる溝で、検出面での幅約３ｍ、深さ約１ｍをはかる。溝の断面形は緩やかな逆台形を呈しており、南側肩部には等間隔で丸木杭が打ち込まれていた。これらの杭は護岸施設と思われる。溝の北側には水田耕土の堆積が認められたので、周囲には水田が広がっていたと推定される。ただし調査地区内において溝の南側では水田耕土の堆積を検出しえなかった。

堆積状況や規模からみて、この溝は西から東へと流れる水路であろうと推定され、堆積土中からは各種の瓦器・陶磁器片が多数出土した。年代的には１７世紀前半代から１９世紀後半代までのものが混在しており、一部に１３世紀代の瓦器椀も含まれている。

古地図および絵図などとの照合を行った結果、この溝は江戸時代の「蔵本村」周辺地域における基本地割をなした方一丁の方格地割りの区画線にあたることが判明した。しかも絵図面にはこの区画線上には水路および道路があったと表現されており、北側に溝があって道路は南側の土手に沿って設けられているのである。こうした状況は調査結果ときわめてよく符合する。つまり溝の南側では水田耕土の堆積を認めず、しかも溝の南側にだけ護岸施設の杭が打ち込まれていた要因は、溝の南側に道路が併走していたためだと合理的に説明づけられるのである。

②ＳＤ０１・０２・０３

調査区北半部を東西に併走する３条の溝で、北側の２条は途中で合流し１筋になる。幅約５０cm、深さも深い所で３０cm程度の狭く浅いものであった。堆積土中には遺物がほとんど入らず、弥生土器片を数点検出したに過ぎない。流水の形跡も認められなかった。調査時にはこれらの溝が中世期に該当する可能性が高いと推定したが、江戸期の水田耕土層直下でもあり、遺構の年代が中世までさかのぼるのか否かは不明である。

③ＳＤ０４

調査区南西隅から北東隅に向かって流れる自然流路であり、弥生後期に形成されたと考えられる。流路の断面形は緩やかな逆三角形を呈しており、幅は検出面において約５ｍ、深さ２ｍ程度と推定された。流路の中心部は逆台形状に窪んでおり、その幅は２ｍ、深さ７０cmをはかる。堆積土は粗砂層とｼﾙﾄ層からなり、粗砂層の堆積状況や厚さからみて、一定期間恒常的な流水があったと推定される。またこの流路全体は粗砂層で覆われており、埋没過程の最終段階で相当規模の洪水があったら

しいことがうかがわれた。

堆積土中からは表面の磨滅した多量の土器類が出土した。多くは弥生後期のものであるが、一部に弥生前期末の土器が含まれる。木器類等、他の遺物は検出されなかった。

本遺構の調査については、地下水の湧水が激しく丁寧な掘り下げが困難であったこと、洪水砂の堆積層としてすでに処理しつつあったこと、調査期間に余裕がないこと、自然流路であることが確実であることなどの理由から、全体を掘り下げることは断念し、幅１ｍのトレンチ調査で規模や堆積状況の確認を行うに止めざるをえなかった。

９　出土遺物

出土遺物には土器類・陶磁器類・石器があり、数量はコンテナ６箱分ある。

図５にはこれらのうち遺存状態の比較的よいものを示した。①は須恵器杯で口径１３㎝、８世紀代のものである。②は土師器壺で口径１８㎝、二重口縁壺で口縁部側面に櫛描き波状文をつける。古式土師器として徳島県宮谷古墳出土例に近似した特徴を備えており、注目すべき資料である。③は打製石包丁である。②の土器とともに出土した。結晶片岩製で片面に自然面を残す。なお本例は、古墳時代初頭になっても徳島県域では依然として石器が用いられていたことを示す好例だといえよう。

１０　まとめ

本調査において判明し、今後の課題として残された重要な問題のひとつは、近世における基本地割りの施工年代がどの時代までさかのぼるかについてである。先に述べたように今回の調査で確認された近世の溝は方一町の区画線上に設けられたものであった。いうまでもなくこうした形態の地割り法は「条里地割」と呼ばれるものであり、施工年代は古代とも中世とも説かれているが、定説をみるまでには至っていない。本地域の条里地割についても同様である。しかるに今回の調査において、溝内の堆積土中から１３世紀代の遺物が一定量認められたことは、溝の最初の掘削は１３世紀であった可能性を示唆するものであり、ひいては本地域の条里地割が中世前期に施工された事実を物語る重要な資料ともなりうるものであった。ところが調査中は近世溝として一括処理したために、これら貴重な資料の原位置を押さえ、層位関係を詳細に検討することは果たせなかった。

絵図や古地図との対比によって復元される蔵本地区の地割区画状況は図４に示し

たとおりである。今後の調査において当該地区にあたったときは、中・近世遺構として慎重な取り扱いが必要であることを明記したい。

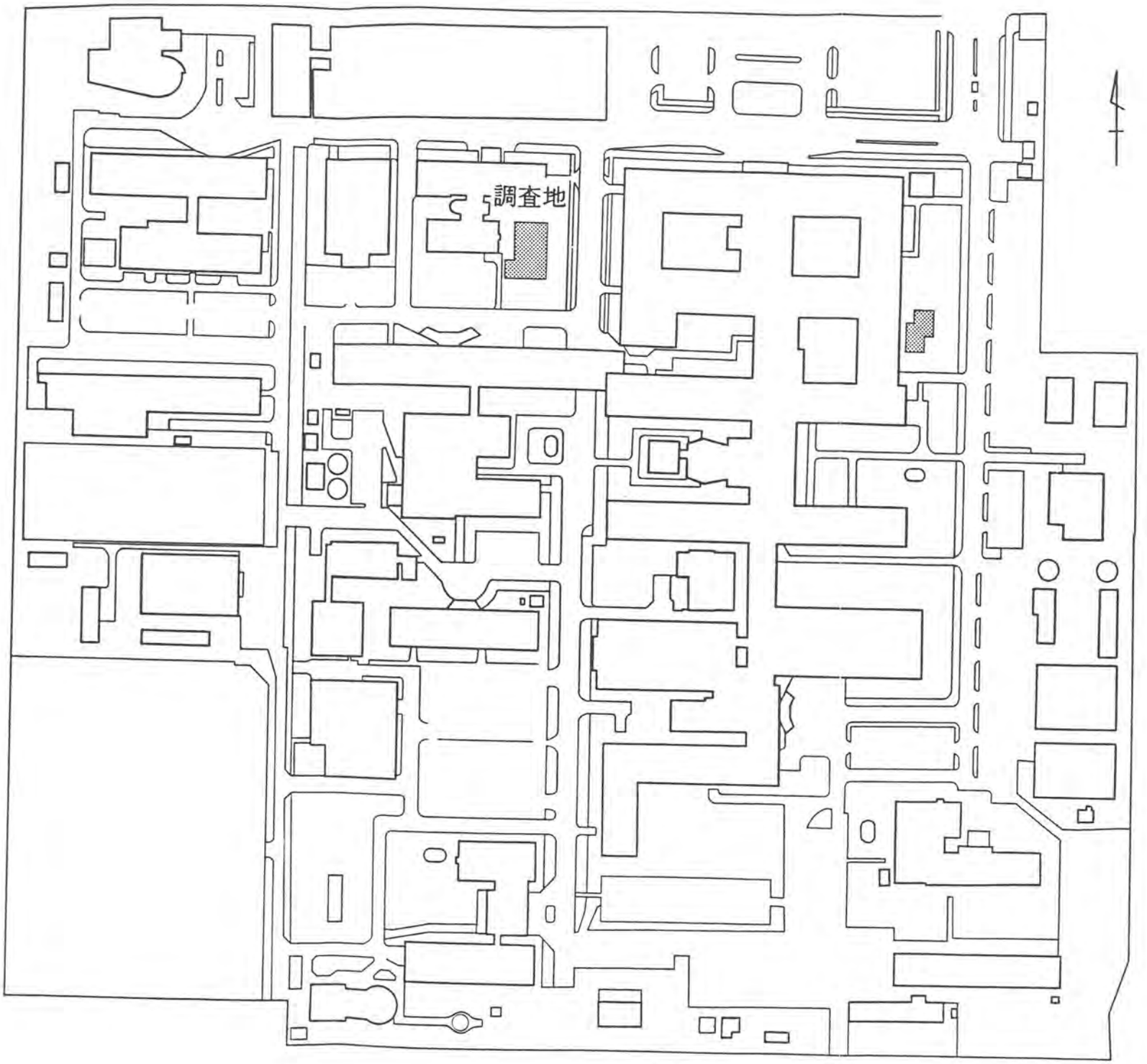


図1　調査地の位置　　(1/2000)

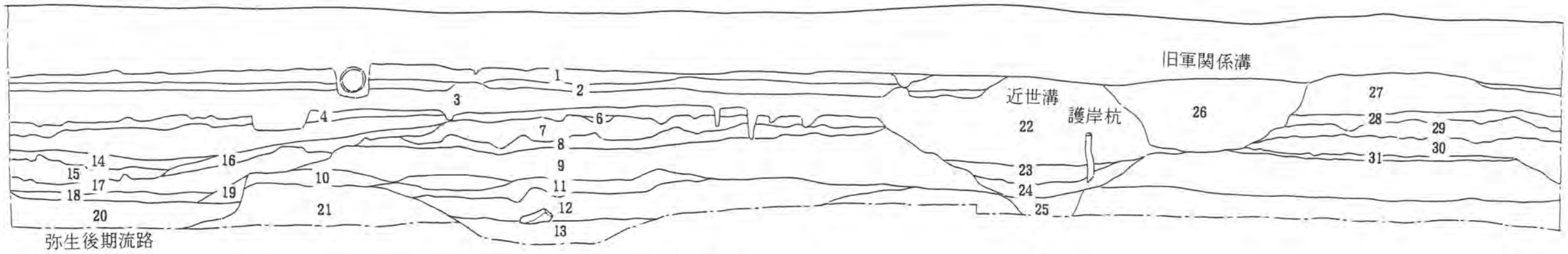


図２　堆積状況（東側壁面）

1	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	ｼﾙﾄ質粘土	
2	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	ｼﾙﾄ	
3	暗ｵﾘｰﾌﾞ色	ｼﾙﾄ	（ﾏﾝｶﾞﾝ･鉄分層状に入る）
4	ｵﾘｰﾌﾞ褐色	ｼﾙﾄ	（ﾏﾝｶﾞﾝ・鉄分含む）
5	暗灰黄色	ｼﾙﾄ	（ﾏﾝｶﾞﾝ・砂粒含む）
6	灰色	砂	（⑤のｼﾙﾄをブロック状に含む）
7	灰色	ｼﾙﾄ	（ﾏﾝｶﾞﾝ・砂礫含む）
8	にぶい黄褐色	ｼﾙﾄ	（砂礫含む）
9	黒褐色	ｼﾙﾄ	（ﾏﾝｶﾞﾝ・砂礫含む）
10	ｵﾘｰﾌﾞ褐色	ｼﾙﾄ質粘土	（鉄分含む）
11	灰色	ｼﾙﾄ質粘土	（鉄分・砂礫含む）
12	灰色	ｼﾙﾄ	（砂礫含む）
13	灰色	粗砂	（粘土・砂礫含む）
14	ｵﾘｰﾌﾞ黒色	ｼﾙﾄ	（砂粒含む）
15	ｵﾘｰﾌﾞ褐色	ｼﾙﾄ	（砂粒含む）
16	暗灰黄色	ｼﾙﾄ	（砂粒含む）
17	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	中粒砂	（鉄分層状に入る）
18	黒色	ｼﾙﾄ質粘土	（粗砂含む）
19	にぶい黄橙色	粗砂	（鉄分多量に含む）
20	灰色	ｼﾙﾄ質粘土	（粗砂・ブロック状ｼﾙﾄを含む）
21	黒褐色	ｼﾙﾄ質粘土	（鉄分をブロック状に含む）
22	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	ｼﾙﾄ	
23	ｵﾘｰﾌﾞ黒色	ｼﾙﾄ	（極細砂・少量の炭化物含む）
24	灰色	ｼﾙﾄ	（極細砂含む）
25	ｵﾘｰﾌﾞ黒色	粗砂	
26	ｵﾘｰﾌﾞ黒色	極細砂	
27	灰色	ｼﾙﾄ	（ﾏﾝｶﾞﾝ・鉄分含む）
28	ｵﾘｰﾌﾞ黒色	ｼﾙﾄ	（ﾏﾝｶﾞﾝ・砂礫含む）
29	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	ｼﾙﾄ	（ﾏﾝｶﾞﾝ・砂粒含む）
30	灰色	極細砂	
31	ｵﾘｰﾌﾞ褐色	ｼﾙﾄ	（ﾏﾝｶﾞﾝ含む）

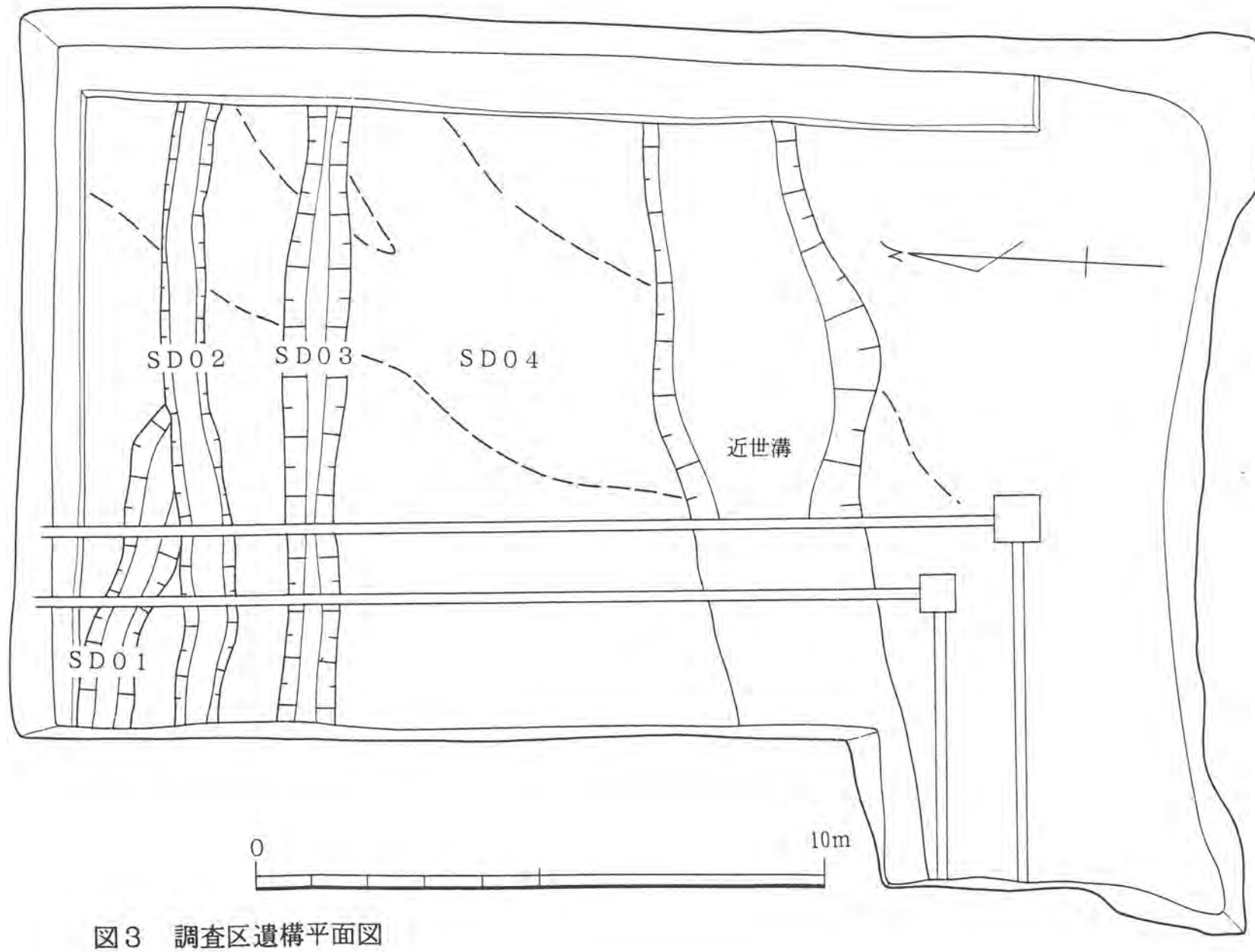


図３　調査区遺構平面図

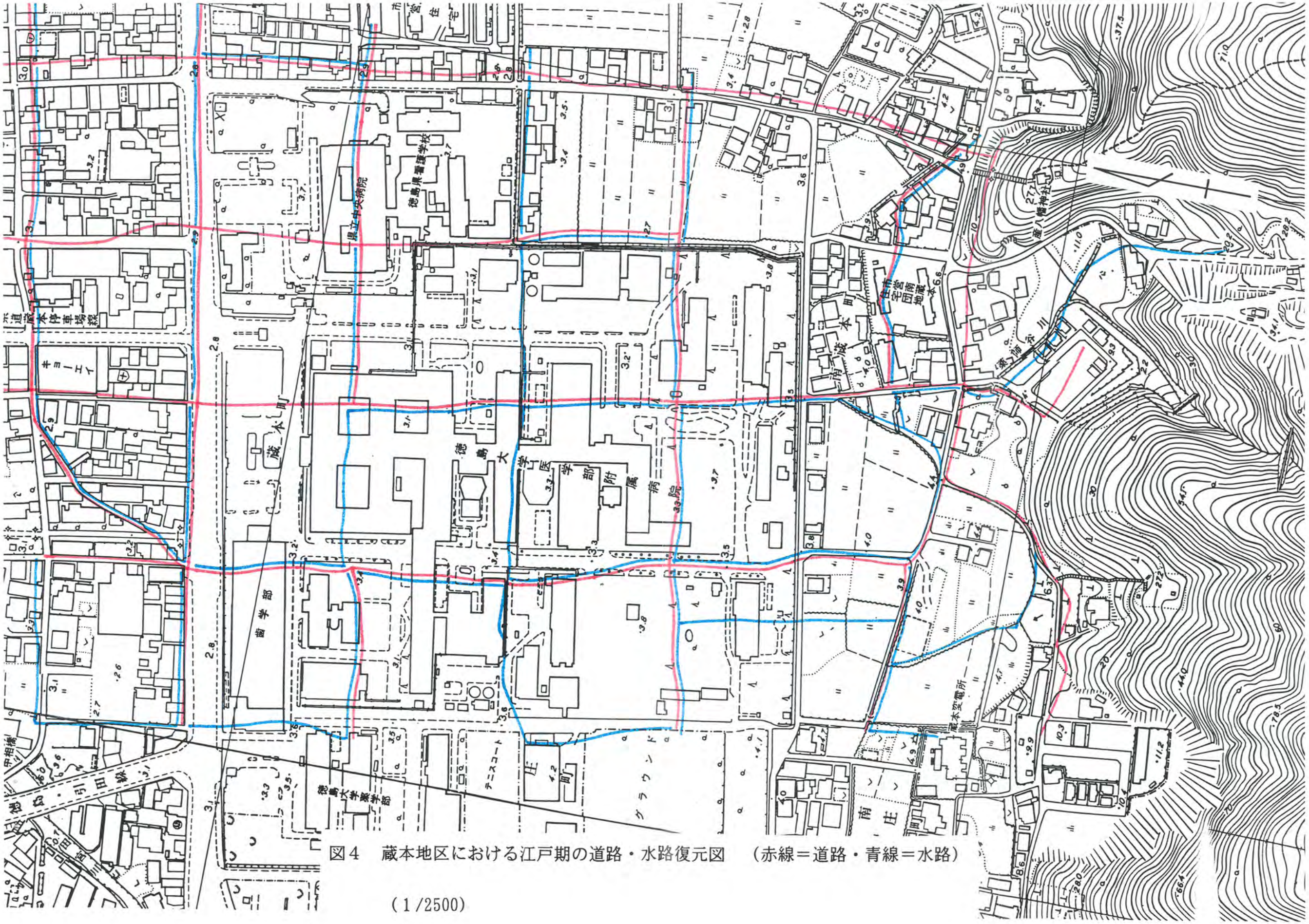
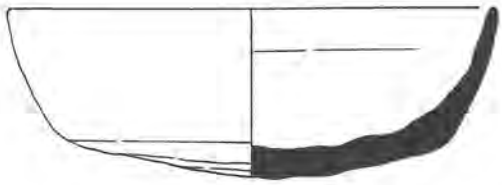
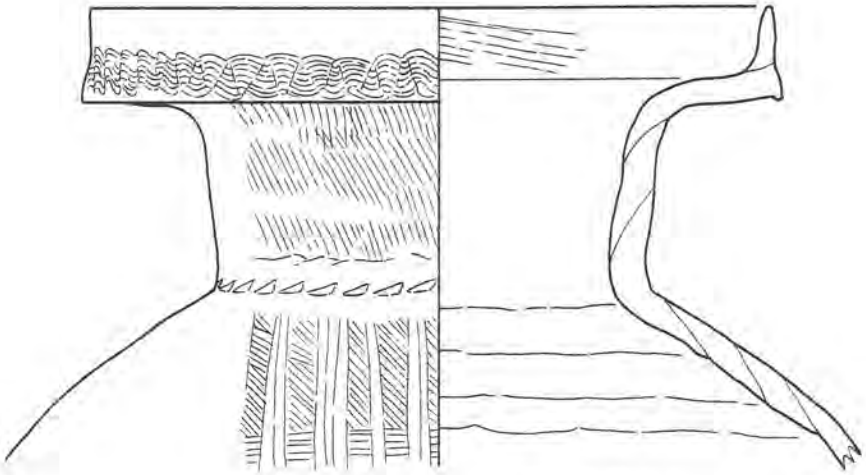


図４　蔵本地区における江戸期の道路・水路復元図　（赤線＝道路・青線＝水路）

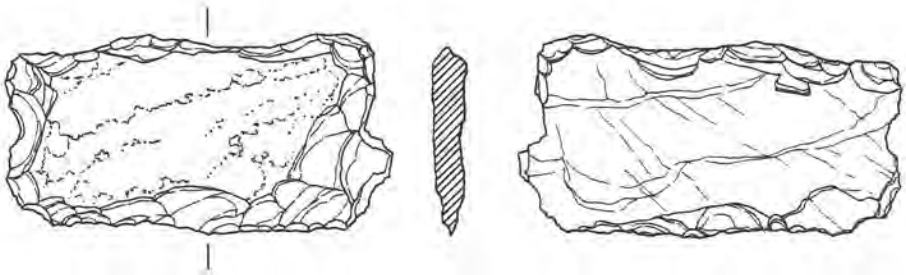
（1/2500）



① 29層出土　須恵器　杯



② 30層出土　土師器　壺



③ 同上　　結晶片岩製　石包丁

図5　出土遺物実測図（縮尺1/2）

調査風景

ＳＤ０１・０２・０３完掘状況（西から）

土師器壺の出土状況

ＳＤ０４の堆積状況（土層断面）

近世溝完掘状況

調査地の全景